

科目名	メディア論		
授業形態	講義	学年	2
開講時期	2023年度 後期	単位数	2
担当教員	御手洗 陽		
内容および計画	より創造的な暮らし(社会・文化・生活)の実現をめざす、さまざまなメディア利用の活動や取り組みにふれることで、自らの創造性を高めるための学習の機会にする。歴史を手がかりに現在とは異なる利用の形態を学び、アートやデザインにおける実験的な利用を視野に入れ、体感的に学ぶための実習的な課題も適宜組合せながら講義を進める予定。なお多くの回をオンライン(リアルタイム配信)で実施予定。		
1	イントロダクション シラバスに基づく科目の概要、成績評価方法、履修する上での注意事項について説明する。創造的なメディア利用にむけて、メディアを再発見することの重要性とそのための方法について理解を共有する。		
2	映画メディアの再発見(1) 課題「映画の観察」 ノートやメモを作成しながら、映画作品の登場人物によるメディア利用の観察に取り組むことで、制作における知恵や工夫に目を留めて評価できるようになる。		
3	映画メディアの再発見(2) 課題「映画の観察」 ノートやメモを作成しながら、映画作品の登場人物によるメディア利用の観察に取り組むことで、制作における知恵や工夫に目を留めて評価できるようになる。		
4	映像メディアの再発見(3) 映像文化の生成と変容 初期映画や映画以前の映像利用の歴史を視野に入れることで、私たちにとって自明な利用を意識的にふり返られるようになる。		
5	映像メディアの再発見(4) 映像の実験的利用 デザインやアートにおける映像メディアの実験的利用を視野に入れる。それを通じて多様な利用のかたちを知り、知恵や工夫に目を留めて創造性を評価できるようになる。		
6	音響メディアの再発見(1) 課題「音響の記述」 サウンドスケープ概念を手がかりに私たちをとりまく音を記述する。それを通じて聴覚を通じた環境との関わりについて再考できるようになる。		
7	音響メディアの再発見(2) 音響文化の生成と変容 ポータブルオーディオをはじめとする音響利用の歴史にふれることで、私たちにとって自明な利用を意識的にふり返られるようになる。		
8	音響メディアの再発見(3) 音響の実験的利用① デザインやアートにおける音響メディアの実験的利用にふれる。それを通じて多様な利用のかたちを知り、知恵や工夫に目を留めて創造性を評価できるようになる。		
9	音響メディアの再発見(4) 音響の実験的利用② デザインやアートにおける音響メディアの実験的利用にふれる。それを通じて多様な利用のかたちを知り、知恵や工夫に目を留めて創造性を評価できるようになる。		
10	文字・活字メディアの再発見(1) 課題「文字の生成」 線がおりなす模様から意味のある文字が生成する過程を体験し、利用し慣れた文字・活字メディアを意識的にふり返られるようになる。		
11	文字・活字メディアの再発見(2) 書物(文字・活字)文化の生成と変容 巻物から冊子本への変化や本棚の誕生、黙読の浸透など、文字・活字利用の多様なかたちを知ることで、私たちにとって自明な利用を意識的にふり返られるようになる。		
12	文字・活字メディアの再発見(3) 書物(文字・活字)の実験的利用① デザインやアートにおける書物(文字・活字)メディアの実験的利用にふれる。それを通じて多様な利用のかたちを知り、知恵や工夫に目を留めて創造性を評価できるようになる。		
13	文字・活字メディアの再発見(4) 書物(文字・活字)の実験的利用② デザインやアートにおける書物(文字・活字)メディアの実験的利用にふれる。それを通じて多様な利用のかたちを知り、知恵や工夫に目を留めて創造性を評価できるようになる。		
14	リサーチを活用したメディアの実験的利用 テート、デザイン、クラフトなどにおける、リサーチを通じて見出された、さまざまなモノをメディアとして活用する取り組みを知り、知恵や工夫に目を留めて創造性を評価できるようになる。		
15	まとめ :メディアの再発見から創造的利用へ		

	最後にメディア利用の観察技法と評価方法を学んだ成果をふりかえり、たしかめる。それを通じて身近なメディアを再発見できるようになり、今後のメディアの創造的な利用に向けて、たしかな一歩を踏み出すことができる。映像・音響・文字や活字などをはじめとして、さまざまなモノが媒介する働きを担い、美的な出来事や人の心を動かす体験を生み出す際の、メディア利用のかたちを広く、深く知ることができる。				
教科書					
	タイトル	著者名	出版社	ISBN	発行年
教科書は特に使用しない。必要に応じて印刷物を配布する。					
参考書	1)マクルーハン+フィオーレ『メディアはマッサージである：影響の目録』河出書房新社、2015年。2)宮澤淳一『マクルーハンの光景 メディア論がみえる』みすず書房、2008年。3)キャロリン・マーヴィン『古いメディアが新しくなった時』新曜社、2003年。4)R.マリー・シェーファー『世界の調律』平凡社、2006年。5)エルキ・フータモ『メディア考古学』NTT出版、2015年。				
成績評価					
	評価方法			割合(%)	
	講義時間内に提出するレポート課題			70	
	講義時間外に作成するレポート課題			30	
学習到達目標	メディア論・メディア研究の視点から、私たちの文化の生成や変容を視野に入れ、身近にある使い慣れたメディアを改めて再発見できるようになる。また映像、音響、文字・活字などのメディア利用をめぐるアートやデザインの取り組みを知り、創造性を見てとるリテラシー、いわば眼や耳の使い方を身につける。				
先修条件	特になし。				
実務経験	実務経験あり：企業や行政のために企画・調査を行うシンクタンクの客員研究員を経験。実際に自分の身体（眼や耳）で観察すること、その成果をことばにすることの重要性を実感した。この経験をもとに観察を重視したメディア利用の課題を設計し、受講者と取り組んでいる。				
その他	受講者数にもよるが、創造的なメディア利用を探るために、実習的な課題にも取り組む予定。（ただしデッサンや特殊機器の操作能力等、特別な技能は必要とされない）。また課題の内容にしたがい講義時間外にもレポート作成や報告準備等に取り組む必要がある。				